

特集  
1

## 法学部『やる気応援奨学金』

奨学生 O.B.・O.G. 座談会

# チャレンジを通して 見聞広め、夢の実現へ

## 海外留学、

## 国際インターンシップで

## どう変わったか

法学部に『やる気応援奨学金』というユニークな奨学金制度がある。

「やる気」があるかどうか、が審査の最大の判定基準になる。

チャレンジ精神があれば、語学力があるかどうかは、「2」の次だ。

海外はじめ学外に飛び出して、さまざまな体験を通して見聞を広め、将来につなげる。

これは机上で得るのはまた別の「学び」に違いない。

やる気応援奨学金で、何をできることができたのか。

実社会で活躍する奨学生の O.B.・O.G. に集まってもらい、

奨学金活用術を含め体験談を語り合っていた。 (編集室)

司会 三枝幸雄

法学部教授

出席者 金井優明さん

スミス・アンド・ネフュー(外資系医療メーカー)

佐藤浩史さん

日本銀行静岡支店

太田寛子さん

(株)デンソー

中川佳宣さん

西村あさひ法律事務所

山田(小柳)和花奈さん

外務省

三枝教授 ご出席いただき、有難うございます。今日は、みなさんが学生時代に『やる気応援奨学金』でどのような活動をし、何を勉強して、それが今の仕事にどう繋がっているか、ということを中心に、ざっくばらんに話していただきたいと思えます。では最初に一言ずつ自己紹介からお願いします。

山田 私は2010年に大学院博士課程を卒業し、現在、外務省の国際協力局国別開発協力第二課でODAを担当しています。当課が担当しているのはアフガニスタンと、最近ハイチやチリで有名になっている中南米と南西アジアで、私自身はメキシコ、エルサルバドル、グアテマラ、ブラジルのODA(政府開発援助)をやらせていただいています。

佐藤 私は05年に卒業し、日本銀行に就職して、初めは横浜支店におりまして、昨年4月から静岡支店に働いています。仕事の内容は金融情勢の調査で、静岡県内の金融機関の

経営状態を把握して、経営のアドバ  
イスをするなど金融システムの安定  
に繋がる仕事をしています。

**太田** 私は国際企業関係法学科を  
2006年に卒業しました。今は株  
式会社デンソーという自動車部品  
メーカーで働いています。仕事は営  
業部門の人材育成を担当していて、  
その中でも特に海外の販売会社で働  
く現地の外国人社員の育成を、課題  
として取り組んでいます。

**中川** 私は、2005年に法律学  
科から飛び級で中央大学のロース  
クールに入学しました。ロースク  
ールを卒業した2008年に新司法試  
験に合格して、神戸で修習を1年間  
行ったあと、今は西村あさひ法律事  
務所で働いています。

**金井** 2006年、国際企業関係  
法学科卒業の金井と申します。私は  
ヨーロッパ最大の医療機器メー  
カー、スミス・アンド・ネフューグ  
ループの日本人の管理部門で、人  
事・広報担当として勤務しておりま

す。

## 9年間で約700名が海外研修

**三枝教授** 有難うございました。  
それでは、『やる気応援奨学金』と  
はどういう奨学金かということを通  
単に説明してから、本題に入らせて  
いただくと思います。

『やる気応援奨学金』は2001  
年前期にスタートしました。同年後  
期からは一般部門と海外語学研修部  
門の二つの部門が設置され、200  
3年に長期海外研修部門、2004  
年には、新たに開設された国際、行  
政、法務、NPO・NGOの各イン

ターナシップとリンクして短期海外

研修部門が開設されました。それか  
ら、2005年には、活動内容はか  
なり異なりますが、法曹・公務員・  
研究者部門が開設されています。

2001年度には26名だった奨学  
生は、2005年から100名を超  
え、このところ年平均約150名が  
『やる気応援奨学生』として活動してい  
ます。海外での活動は毎年約90名で、  
これまで9年間で約700名が海外  
へ出かけ、活動先は30か国以上に及  
んでいます。

『やる気応援奨学金』は自分の将  
来のキャリアパスを意識し、さま



三枝幸雄法学部教授（英語担当）  
中央大学附属中学校・高等学校  
校長  
法学部リソースセンター・アド  
バイザー  
前・法学部奨学委員会委員長

ざまなチャレンジを通  
して、自分の夢を実現  
するために必要な能力  
や自信を付けてほしい  
というのが基本的なコ  
ンセプトです。自分で  
活動のテーマを定めて、  
必要な情報をリサーチ  
して実現可能な活動計

画を立て、詳細な活動計画書を作成  
する。書類審査に合格したら、面接  
でプレゼンテーションをする。そ  
して面接審査に合格したあと計画を  
実行し、終了後に報告書を作成する  
とともに、報告会で成果を発表する。  
これがやる気応援奨学生に求められ  
ている基本的なプロセスということ  
になります。

佐藤さんは、『やる気応援奨学金』  
がまだどちらに向かっているかわ  
からないような状況のときに英語分  
野に応募して、合格されたのですが、  
その頃のことをお聞かせいただけま  
すか。

**佐藤** 私は、初めは02年に海外語  
学研修部門で、英語を利用して、ア  
メリカのオハイオ州にあるチーズ工  
場でチーズづくりのインターンシッ  
プを行いました。『やる気応援奨学  
金』が、『やる気』と書いてあった  
ので、一体どのようにやる気を見せ  
ればいいのかということで、語学  
学校に留学するのも一つの手段かと

思ったのですが、超独自性を出した  
ということ、チーズをつくる  
という実験の中で英語を学習する  
という方法を取りたいと思つて応募  
しました。

三枝教授 面白いですね。通ると  
思っていましたか。

佐藤 できるだけ面白いプログラ  
ムにしようと思いましたが、プレ  
ゼンテーションでもそのような  
を心掛けて審査に臨んだのですが、  
五分五分という感じでした。

三枝教授 ホームステイの時に  
お世話になったご家族と、いまでも  
付き合いがあるとか。

佐藤 そうですね。クリスマス  
カードのやり取りをしたりとか、  
定期的に連絡を取ったりしています。

山田 私も、オランダに行つた  
きは本当に身一つで行つて、誰も  
頼る人がいなかったのですが、中  
から国際機関で働いていらつし  
やる日本人のご家族のお家で  
ホームステイをさせていただいて、  
その方は今、

防衛省で働いているので、外務省に  
来たときなどは「お昼を食べようよ」  
というような電話がかかってき  
ます。

### 自分見つめ直す機会に

三枝教授 それはいいですね。太  
田さんは、やはり海外語学研修部  
門でしたね。

太田 私は大学に入った頃から、  
英語を使った仕事がしたいと思  
つていました。ただ、それをどう  
したか、どう形にできるのか、  
そのためにも、いろいろなこと  
をしたらいいのか、全然、わか  
らない状態だったので。その  
ときに、リソースセンターが200

3年ぐらいに本格稼働し始めて、  
そこで『やる気応援奨学金』とい  
う制度を知りました。語学学校  
だけではなく、ポランテアとか、  
実際の経験を通して学べば、  
将来の仕事を生かせるかなと考  
えて、短期の語学留学とポラン  
テアとを合わせて申請をしまし  
た。

三枝教授 そういう話を聞くと、  
うれしくなります。なぜかとい  
うと、少々強引に大学にリソー  
スセンターの開設をお願いした  
ときには、本当に活用される  
だろうかと不安もあつたので  
す。実際には随分、学生が集  
まって、今はあの頃よりも活

発に利用されていますから、  
とてもうれしく思っています。  
語学分野は、エージェントを  
通さずに、自分で語学学校や  
ボランティア活動をするNGO  
やNPOなどの受け入れ先を見  
つける。

そして、自分の興味・能力にあ  
った活動計画を立てて英語の  
申請書を作成させ、英語によ  
る面接に臨むというふうにな  
っています。申請書の作成から  
活動に至るまでは、どのよう  
な感じだったですか。

太田 実は申請から面接までの  
プロセスがすごく勉強になつ  
たと思います。面接で、「どう  
してその学校を選んだのか」「  
海外での経験とか」、など結  
構、掘り下げた質問があるので、  
海外に行く目的や将来のこと  
など、自分を見つめ直す機  
会にもなつたんです。申請書  
の作成で、わからないところ  
を先生やリソースセンターの  
先輩に聞き、アドバイスを頂  
くことで、考え方や資料の書  
き方などをかなり鍛えられた  
と思います。

三枝教授 海外語学研修部  
門には英語、ドイツ語、フ  
ランス語、中国語の分野があ  
ります。それ以外の言語の場  
合、分野としての設定はあり



太田寛子さん  
湘南高等学校  
国際企業関係法学科 (2002年入学)  
海外語学研修部門・英語分野 (イギリス・ロンドン)

ませんが、実際には受け入れていません。中川さんはドイツ語分野でしたね。

## 将来に役立つ、とチャレンジ

中川 私は2年生の春にドイツのハイデルベルグに行きました。その当時から司法試験の勉強をしていたのですが、3年の5月から択一試験を受けられるので、僕の同期はみんな2年の春休みには択一試験の勉強をしています。そんな中、ドイツ留学に行くという話を同期にしたら、「なぜこんな忙しい時期にわざわざ行くのか」ということを結構言われ

ました。ですが、弁護士は自由業です。そんなことが役に立つかわからないし、今、経験したことは後で絶対に役に立つと思っていたので、ここは一步踏み出してチャレンジしてみようとドイツ留学に行きました。

三枝教授 私たちの目的になかった活動モデルの一つですね。法曹を目指すにしても、いろいろな経験をする、いろいろな人を知るといこうとはとても大切なことだと思っております。だから1年生、2年生の段階から八王子を飛び出して、海外で少し勉強をしてみ、それからまた八王子に帰って法曹の勉強に専念する。

中川 語学学校に通うことがメインでした。その他にも、ドイツの連邦憲法裁判所を見学したり、連邦通常裁判所で実際に事件を傍聴したりもしました。向こうではできる限り多くのことを経験させていただきました。

三枝教授 太田さんはロンドンでしたね。  
太田 はい。午前中は語学学校に通って英語を学んで、午後は学校の近くにあるオックスファムというチャリティーショップで、店員として商品を売るなどのボランティアをしていました。単に英語を勉強しに行くのではなく、「日本である程度勉強してきた英語を実践してみたい」という思いがあったので、オックスファムでの活動を選びました。

「やる気」満々をアピール  
三枝教授 短期海外研修部門は、元外交官の専任の先生や、国連で活躍されている専任の先生が、ぜひ学生諸君をサポートしたいということから始まった国際インターンシップの履修者を対象に開設されました。山田さんは国際インターンシップができてすぐに参加したんですね。

山田 そうです。一期生でした。  
三枝教授 その頃のことを少し紹介していただけませんか。  
山田 すごい失敗談ですけども、いいですか。

三枝教授 失敗談は歓迎ですね。  
山田 先生方から、国際インターンシップというものができるといいう話を聞いて、やってみなと思ったのですが、国際インターンシップの最初の年だったので、海外に行ける人は限られていたのです。それで、たまたま授業をサボった日に海外に行く人が決められてし



中川佳宣さん  
甲府南高等学校  
法律学科中退（飛び級）（2002年入学）  
中央大学ロースクール  
新司法試験合格  
海外語学研修部門・ドイツ語分野（ドイツ）

そしてその経験が将来に生きる。これが語学などを担当する私たちの考えた望ましい活動の一つだったので。ドイツで実際にはどのような活動をしましたか。

たおかげです。

まっついで、次の週に元気にやる気満々で行ったら、「もう決まった」と言われたんです。「どうしても行きたい!」と思って、先生を追いかけについて、「もう1人ぐらい何とかありませんか」と頼んで、横田洋三先生の教え子で、国際機関で働いていらつしやる何人かの方のメールアドレスを教えられて、「ここにアクセスして、どれか引つかかったら行ってもいい」と言われて、それで「どうしても行きたいんです」とメールを書きまくりました。

でも、学部生はそれまで国際機関では受け入れていなかったの、そこを何とか、「これはやる気応援奨学金という奨学金なので、やる気はあるので入れてください」などと書いて:(笑)。

**三枝教授** これは楽屋話ですが、実は、国際インターンシップ立ち上げの際、横田先生と英語担当のヘツセ先生と相談したのですが、横田先生からぜひインターンシップで外国

に行く学生諸君にも奨学金でサポートをしてほしいというお話があったのです。奨学金は限られているから、院生をジュネーブの国連人権委員会に連れて行く時に、インターンシップ受講者でモチベーションの高い学生を2〜3人連れて行ければと考えているという話だったのです。この部門は今年2、30名が利用しています。ずいぶん増えました。それで、学部生として行って、向こうではどのような活動をしたんですか。

### 初の学部生インターン

**山田** 学部生を受け入れるというのは国際機関としても初めてだったので、お互いにどうしていいかわからない状態だったのです。逆に言うと、自分の頑張り次第で学部生のインターンの質が向こうに印象付けられてしまうな、という思いがあったので、オランダのハーグにあるいろいろな国際機関、国際司法裁判所や

に行く学生諸君にも奨学金でサポートをしてほしいというお話があったのです。奨学金は限られているから、院生をジュネーブの国連人権委員会に連れて行く時に、インターンシップ受講者でモチベーションの高い学生を2〜3人連れて行ければと考えているという話だったのです。この部門は今年2、30名が利用しています。ずいぶん増えました。それで、学部生として行って、向こうではどのような活動をしたんですか。



山田(小柳)和花奈さん  
福島女子高等学校  
国際企業関係法学科(2000年入学)  
中央大学大学院博士後期課程修了  
国家一種合格  
一般部門(オランダ・ハーグ)  
OPCWでのインターンシップ)

ICTY(旧ユーゴ国際刑事裁判所)、国際問題のインスタテュート等に毎日のようにアポイントを入れて、どういう仕事をしているのか、キャリアパスを築いていくにはどういう過程を通ればできるのかを、いろいろな人に聞いて回ったりしました。

それと、当時、OPCW(化学兵器禁止機関)で問題になっていた国際法の案件があったのですが、受け入れてくださった方に、それに関する見解を書け、と言われて書いていました。

**三枝教授** これは想像だけけれど、向こうにも学部生でできるのか

などという一方で、ちよつと面白いなという気持ちがあったと思うのです。実際に仕事を十分にこなす能力がなくても、本当にやる気があつてその経験を先に繋

げようとしている人には興味を持つものです。山田さんの場合はおそらく、元気で面白い学部生が来ると受け取られたのではないのでしょうか。今は外務省のお仕事ですから、うまく繋がったことですよ。

**山田** 繋がりました。私はインターンに行っていなかったら、絶対に今、外務省に受かっていないですね。

**三枝教授** わかりました。法学部に入つてラッキーな人は、1年生のときに『やる気応援奨学金』の海外語学研修部門で受給して、2年生で短期海外研修部門で活動して、それ



金井さん（左）と中川さん（右）

をもとに3年目に、150万円支給される1年間の長期海外研修部門の奨学生となります。順調に奨学金を利用すると、こうなるという例なのですけれども、金井さんは、まず語

学研修部門を受けてから長期海外でしたね。

金井 私は中大杉並出身なのですが、コミュニケーションのツールで

身に付けたいと考えて法学部に進学しました。在学中に学部留学し、4年間で卒業するところが一番大きな大

TOEICはいくつなんだ？」と聞かれて。そういうスコアが必要ということも知らなかったもので、どこから始めたらいいいのか途方に暮れていたところでした。

短期部門の準備を始めたとき、アブリケーション・フォームの「キャリアパスをどのように考えていますか？」という質問で初めて留学をその後はどうやって生かすか考えるようになりました。今、採用担当者として仕事をしています。早い時期にどのような仕事に就きたいかを考える機会があったのは、すごくよかったです。

三枝教授 今、TOEFLやTOEICの話が出ましたが、この手の奨学金だとハードルは高いだろうかと普通は皆さん思うでしょう。でも何点以上でなければ応募資格はありませんよという、そんな固い話はないのです。やる気があればいいということ。だから点数が低い方がいいということはないですけれども、

低くてもいいのです。

基本は自分の今の能力に見合った計画を立案して、実現可能なプランに持っていきけるかということなので、TOEIC、TOEFLの点数が高い人でも、ちょっと外国に行つてみようかなどという気軽な気持ちでいると、書類選考も通らないのです。

### 挑戦し、キャリア開ける

金井 私も、自分の今いる地点からどれだけチャレンジできるかということ。で審査してもらえんというところが、すごく新鮮だったのです。それは今、仕事でもすごく役立っています。自分の今からさらに120%、130%でできることを提案していくことで、自分のキャリアがどんどん開けていっているのは、やる気応援のおかげと思っています。

三枝教授 要するに、今いるところからどれだけ上げる意思があるのか。それと自分のキャリアデザイン、キャリアパスのイメージとどのよう

に繋げられているかというところなのです。

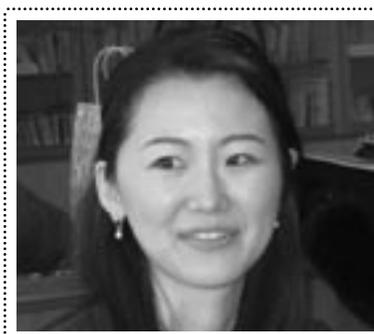
**金井** 初めての短期部門ではイギリス、オックスフォードに行つて、午前中はキャンサー・リサーチという団体でチャリティーショップのボランティアをして、午後は語学研修で知り合いになった方が活動されていた市議会の会議を聞きに行ったりしました。裁判所の傍聴にも行きましたが、今でもかつらを被つて裁判をしていて、イギリスの社会を肌で感じてますます興味がわきました。

そのあと、長期部門に向けて準備も始め、同時にアプリケーション・

フォームで自分の仕事を考えるようになったら、国際公務員にも興味があったので、リソースセンターでユネスコの日本委員会が入っている部門のインターン募集が文科省であるのでやってみたらという話を受けて、文科省のインターンに参加しました。ユネスコの仕事のお手伝いをしたことで改めて企業の担う役割にも気がつき、最終的にどのような仕事に就こうか具体的に考えるようになりました。

**三枝教授** 今は、どのような仕事をしていますか。

**金井** スミス・アンド・ネフュー



**金井優明さん**  
中央大学杉並高等学校  
国際企業関係法学科（2002年入学）  
海外語学研修部門・英語分野（イギリス・オックスフォード）  
長期海外研修部門（イギリス・オックスフォード）

というイギリスが本社の医療機器の会社で、人事・広報担当として働いています。社員の方の人事労務管理と、新卒採用活動がメインの仕事ですが、企業の情報

を外に発信するためのシステム、体制を会社の中でつくるという広報活動の仕事が、入社以来の私のミッションですね。

### 身に着いた粘り強さ

**三枝教授** わかりました。太田さんは。

**太田** 私は海外の販売会社で働く、現地の外国人社員の育成をミッションとして仕事をしています。タイやインドなど現地の外国人とメールや電話でやり取りすることが多く、日々、英語を使った仕事をしています。

外国人と仕事をしていると、想像を超える、予想もしていなかった事態がいろいろ起こります。こちらの発言が意図していないように受け止められたり、思ってもみない反応が返ってきたりということが多々あるのです。そんな時、『やる気応援奨学金』で培った粘り強さが、すごく生きています。

例えばオックスフォードに行つて、すぐにボランティアができると思つたら、面接や書類選考などルールがあり、「1か月待つてもらわなければいけない」と言われて…でも1か月したら私は帰国しなければいけなかつたので、ホストファミリーに推薦状を書いてもらったり、交渉に一緒に行つてもらつたりと必死に掛け合つて、通常より早めに受け入れてもらうことができました。そういう時の行動力や、苦しくても諦めない粘り強さというのは、今の仕事の中でも、すごく生きています。

**三枝教授** そう簡単にパニックにはならないという、経験を積んでいるということですね。

**太田** まさにそうですね。

**三枝教授** それは本当に大切だと思います。繰り返しになりますが、中央大学の学生には、何か切っ掛けをつくって八王子から出て、そして語学でも専門でもいいけれども、外で学んでみて、いろいろな経験をし

て、そして八王子に帰って来て、今までの学びとは違ったもう一段、二段高いステージで新たにスタートを切ってほしいと思っています。

### 思い知った世界の広さ

山田 本当にそのとおりだと思います。外に行くと、世界は広いというのを思い知らされます。八王子はすごく環境がのほほんとしたのどかな環境なので、何かそこに落ち着いてしまつて、世界はそこで完結しているというような錯覚を起こしがちなのですが、外に出てみて、こんなにもモチベーションの高い、大人になつても何か一つの目標に向かつて成長し続けている人というのが世の中には沢山いるんだということを私は国際機関に行つて知つて、衝撃を受けたのです。

私は八王子の山の中でのほほんと暮らしながら、自分は将来何をやりたいのかということがずっと分かっていませんでした。自分が正義感を持つ

て、理想を持って、納得し誇りを持つてできる仕事。それが企業なのか、中大の学生みんなが目指す弁護士なのか、それともそれ以外なのかということが分からなくて。ただ漠然と、パブリックグッドに関わる仕事に就きたいとは思っていたので、国際機関というのがどういふものなのか、そこに将来、目指す価値はあるのかということを見にいきたくて行つたのです。

答えはイエスでありノーでした。モチベーションの高い、本当に理念をそのまま貫いた仕事をしている人たちが存在するという意味では、大いにイエスでした。自分は将来、絶対にここに关わる仕事に就きたいという強い憧れと決意がその時に芽生えて、最終的に外務省を目指すようになった一番のモチベーションもやはりそこにあります。

ノーであるというのは、パブリックグッドを追求したときに軸はどこにあるかという点で疑問があつたか

らです。必ず全世界にとつて絶対に良いということはそうなくて、どこかが得をすればどこかが損をするのです。今回のCOP（気候変動枠組条約締約国会議）のように、みんながパブリックグッドのためにやろうとしているけれども、実際に動こうと思つたら、結局、自分の足をどこに置いて動くのかという問題に終始してしまうのです。

パブリックグッドを追求しても、



左から太田さん、佐藤さん、山田さん

たぶん根無し草になって終わるとい  
うこともそのインターンシップで感  
じて、軸は日本に置きたいと思っ  
たのです。

### 見つけた自分の方向性

**三枝教授** インターンの活動が終  
わったあと、のほほんとできる八王  
子でまた新たに学んでみて、新たに  
自分の方向性を見つけたということ  
ですね。

**山田** そうですね。国際法や国際  
政治など、自分は大学でこれをやっ  
たという軸を持った上で仕事に就き  
たいと思ったので、国際法、国際政  
治の実務の世界を垣間見た上で改め  
て博士課程まで国際法を勉強して、  
それで外務省に入れていただいたと  
いうことです。

**三枝教授** 先ほど『やる気応援奨  
学金』がなかったら外務省に入れな  
かったかもしれないと言われました  
が…。

**山田** それは、外務省に入る人は

何が求められるかという点に関わり  
ます。自分が抱えている問題をとこ  
とんまで追求する力のある人、その  
問題に対して行動で示せる人間が外  
務省では求められます。だから面接  
のときも、自分がやりたいことや問  
題意識を持ったことにとどのよう  
に動いたかということを徹底的に聞か  
れます。例えば国際政治に興味があ  
って、『やる気応援奨学金』で国際機  
関に行つて現状を見てきて、それを  
学問に生かして、というような一つ  
のストーリーが作り上げられれば、  
それは外務省でも認めてくれる。そ  
の過程を築いてくれたのは、『やる  
気応援奨学金』以外になかったと思  
います。

**三枝教授** どうも有難うございま  
す。佐藤さんは、金融の勉強もして、  
インターンシップの短期海外研修部  
門で、ロンドンに行きましたね。

**佐藤** 4年生のときです。私も興  
味を絞る込むことができないとい  
う典型的なパターンで、中央大学の法



**佐藤浩史さん**  
岐阜高等学校

法律学科(2001年入学)  
海外語学研修部門・英語分野(ア  
メリカ・オハイオ州)  
短期海外研修部門(国際インター  
ンシップ・金融)(イギリス・ロ  
ンドン)

いろいろな話をし  
たりして視野が広  
がってきて、そう  
すると自分なりに  
たいのは法律家な  
のか、それともほ  
かの何なのかとい  
うことで、さらに  
迷う日々が続いま

学部法律学科に入学した時点では  
法曹志望でして、私は入ったときに  
は検事になったかだったのですけれ  
ども、中学時代はホテルマンになり  
かたりして、興味はいろいろ変  
わってくるころがありました。

その中で1年、2年と法律の勉強  
をやっていて、2年生の夏にチーズ  
工場に行つて、そこで勉強したこと  
を利用して法律家になりたいとい  
う少し無理やりの論理展開を。

**三枝教授** こじつけっぽいね  
(笑)。

**佐藤** そうです。チーズ工場に行  
くと、朝の5時から働いたり、いろ

した。その中で、いろいろある業界  
すべてをバックから支えている産業  
は何なのかと考えたとき、金融とい  
う仕事に興味が出てきたのです。

国際金融インターンシップには、  
4年生の夏に行かせていただきまし  
た。大和証券とのコラボレーシ  
ン事業だったと記憶しているのです  
けれども、大和証券から講師に  
来ていただいて、国際金融について講義を  
受けたりしながら、ロンドンに行き

ました。ロンドンの大和証券SMB  
C支店でインターンをしながら国際  
協力銀行の人にインタビュをした  
り、日本銀行のロンドン事務所の次

長にお話を聞いたりということをし  
ながら、自分の進路は金融でよかつ  
たな、という確認もできました。

## 「やる気」のタスキリレー

三枝教授 ロンドンのシティにあ  
る金融会社に渡りをつけてというの  
は、インターンシップとしては少し  
異例ですよ。シティの金融関係の  
会社にメールを送って、厄介になる  
というか、迷惑をかけたわけでしょ  
う(笑)。

佐藤 そうですね。私たちの時  
は、アジアと香港で大和証券の方の  
サポートを得て、証券取引所などに  
行って、戻ってくるというのが基本  
コースだったのですけれども、私は  
どうしてもロンドンに行きたかった  
のです。なぜかという、金融は  
ニューヨークのウォール街であつた  
り、ロンドンのシティがひのき舞台  
なので、本場の雰囲気味わってみ  
たいと思つたのです。

その時、私は日本銀行の内定をい

ただいていたので、日銀のロンドン  
事務所にお願いをしました。あとや  
る気は人一倍あるので、国際協力銀  
行のロンドン事務所はじめ、いろい  
ろなところにメールを送りました。

そうすると、やる気があるやつが来  
るらしいということで、例えば向こ  
うの職員の方とインタビュウの機会  
をいただいたり、大和証券の現地の  
方々やいろいろな人とお会いしたり  
して、金融市場について学ぶことが  
できたのが非常に大きな経験になつ  
たと思います。

三枝教授 随分、断られたりした  
のでしよう。

佐藤 そうですね。ほとんどだめ  
もとでメールを送っているような感  
じです。そこはやる気で頑張るしか  
ないです。結局、やる気に帰結して  
しまうのですが、やる気のある人が  
行くとそこでやる気のある人に会つ  
て、またやる気のある人を紹介して  
もらうというような、やる気の繋が  
りのようなものがあるのかなと漠然

と感じました。

三枝教授 それはいい話ですね。  
少し失敗しても、へこたれないとい  
うのは、とても励みになる話だと思  
いました。中川さんもドイツの語学  
学校へ行って苦勞をされたことが  
あつたようです。

## トラブルがいい体験に

中川 はい。ドイツに出発する2  
週間ぐらい前になって1枚のFAX  
が実家に送られてきました。最初に  
決めていた語学学校が倒産したとい  
うんです。あと2週間しかないのに  
どうするのかという話になって。ド

イツ語担当の小林先生などにもご相  
談して、まだ行く気、やる気がある  
のであれば、お金は学校で何とかす  
るから、とりあえず他の語学学校を  
あたつてみなさいという話になりま  
した。何とか新しい語学学校も見つ  
かつて、結局、無事に出発すること  
ができました。

それでも、いきなりFAXが1枚

送られてきて「倒産しました」と言  
われても腹の虫が収まりません。そ  
こで、向こうでは、管財人をやって  
いる弁護士事務所まで行って、お  
金は何とかならないのかという話を  
してきました。話をする中で弁護士  
は、「受講生なんかいっぱいいるから、  
どうせ返ってこないよ」と言つてき  
ましたが、こちらとしてもお金は返  
して欲しいので、債権届出をしてき  
ました。ですが、やはり難しいとこ  
ろがあつて、まだ全然、返つてこな  
い状況です。

ただ、片言のドイツ語や英語を使  
いつつ、向こうの弁護士と交渉した  
経験や、そのようなチャンレンジを  
する気概は今の弁護士業とも繋がつ  
ていると思いますし、いい経験がで  
きたと思つています。

三枝教授 今のようなケースだと、  
法学部の奨学委員会の先生方は応援  
したくなるのです。本当にやる気を  
見せると、みんな応援したくなるの  
です。実は、やる気応援奨学生には



### 体験を交えて語り合う出席者たち

いろいろな失敗談がありま  
す。ですが、思いがけない  
経験、要するにストーリー  
になかった困難を克服した  
人の報告書や体験談は私た  
ち教師のモチベーションも  
高めるのです。

**金井** 私も長期留学の直  
前に大きな病気をして、止  
められるのではないかと  
いう思いがありましたけれど  
も、その病気の経験とやる  
気応援の経験がなかったら、  
今の会社には結び付いてい  
なかつたと思うのです。法  
律をスペシャリティとし  
て、日本と海外を結ぶ何か  
の仕事をしたと思うとい  
えども、それが何の産  
業なのか、公務員なのかと  
いうのが私も自分に落とし  
込めていなかっただけで  
も、病気をして、健康であ  
ってこそいろいろなことがで

きるということ、医療に携わる産  
業は特に法律が厳しいという  
ことで、自分が活躍できるの  
はここではないかと思え  
たきっかけになりました。

1年間の留学を通して、大陸法を  
ベースとする日本の法律と、判例法  
をベースとする英米法を、日本語と  
英語の両方で習得できたことが、い  
ま広報を担当できている理由でもあ  
るのです。本社が多国籍企業なので  
イギリスの法律を準拠法として活動  
している組織として情報を発信して  
いく体制をつくることは、会社の中  
で私しかできないことに今、なっ  
ているというのは、自分の中でも自信  
になっています。

### リソースセンターの活用

**三枝教授** そうですか。有難うご  
ざいます。それでは次にリソースセ  
ンターのサポート体制について感想  
を聞かせてください。

**佐藤** リソースセンターは、やる  
気応援奨学金を利用して海外に行っ

た人のレポートが写真とともに壁に  
張られていて、先輩たちがどのよう  
な活動をやっているのかということ  
が把握できるようになっており、ま  
た昔の報告書も読めるようになって  
います。また、経験者がスチューデ  
ント・コミッティーと呼ばれ、先輩  
としてサポートをする体制になっ  
ていて、スチューデント・コミッ  
ティーに相談に行くと、誰かが相談に乗  
ってくれる。『やる気応援奨学金』の  
申請書は全部、英語で書く必要があ  
るし、面接も英語です。内容をどう  
書けばいいのかなど、かなり迷う学  
生も多いと思うのです。そういう人  
たちにアドバイスをする空間がリ  
ソースセンターにはあって、楽しく  
やっていったような気がします。

**三枝教授** 太田さんも随分、アド  
バイスをしたのではないですか。

**太田** そうですね。空き時間にリ  
ソースセンターに行くと、受付の方  
が「今、イギリスに留学したいと  
思っている学生がいるのだけれども、

話を聞いてくれない？」と繋ぎ役になつて下さつて、相談に乗つていましたね。自分も仲間達と情報交換をしてレベルアップができて、本当に居心地がよくて素敵なお場所だつたと思つています。

留学というのは、「特別な人でなければできないのではないか」とか、「こんな国に行つてインターン

シップなんて、とても無理では」とか、ちよつとレベルが高いイメージを持つ人もいると思うのです。実際、私もそうでした。でも、「何となく漠然とやる気はあるのだけれど」と

いう状態であつても、リソースセンターに行くとその形にしてサポートをしてくれる方がたくさんいるので、本当に気軽な気持ちで来てもらえる場所になればいいと思つています。

**三枝教授** そうですね。私たちがリソースセンターを構想したときに一番ベースに置いたのは、ヒューマンリソースということなのです。奨

学金をもらつて海外へ行った人、いい活動をした人というのは、その体験を人に話したくなるんだよね。だからそういう人たちが集まるスペースがあれば、これから活動する人、した人の間で情報交換が可能になり、お互いに刺激を与え合うようになるだろうと考えたのです。

人の繋がりとということでは、中央大学を卒業された方々の中には、「海外へ飛び出して行つて、いろいろな経験をしてみたい、とは素晴らしい。私たちは在学中そんなことは考えなかつた。応援しますよ」という方が実はいっぱいいらっしゃるのです。本当に有難いことですが、『やる気応援奨学金』の資金の一部はそういう方々のご寄付によつて支えられています。年に一度、法学部主催で、支援してくださっている方々と

学生諸君が一緒になつて、「やる気の夕べ」というパーティーを開いています。中川さんはそこでスピーチをしてくれましたね。

## 卒業生の資金援助に感謝

**中川** はい。奨学金をいただいた当時は、この奨学金はすべて大学から出ていると思つていました。どのような方がこの奨学金を援助してくださつたのか分からないので、実際にそういう方々とお会いして、自分の経験と感謝の気持ちを話させていただく機会があつたことは、とても良かったと思います。

**三枝教授** 寄付してくださる方も、みなさんと顔を合わせることを、とても喜んでくださるのです。ほかに出席してどうでしたか。

**山田** 私は新宿の京王プラザでやるの間違つて、八王子まで行つてから気が付いて…(笑)。本当にすみません。遅れてきて、そのまま走つて壇上まで上がつて喋つたのですが、やはり何か守られていると思つたね。そのようにサポートをしてくださる方が集まることで、自分はこの大学に守られてこういう活動ができ

て、卒業した今も自分の行く末を見守つてもらえているのだな、と親戚に会うような安心感をすごく感じました。

**三枝教授** 中大で勉強をして、それぞれ社会に散つていって、自分に合った仕事をして社会に貢献している、そういう人たちがやる気の輪で繋がつていくのはとてもいいことだと思つています。これからも、そういう方向で私たちも努力をしたいと思つています。

それでは、仕事に一生懸命取り組んで活躍されている立場から、『やる気応援奨学金』は、このように育つていってほしい、あるいは後輩たちに、こうなつてほしいということを聞かせてください。

## 「若者よ、(学)外へ出よ」

**金井** 『やる気応援奨学金』は、声を発すれば聞いてくれる人がいる仕組みだと思つています。社会人になつてからも、声を発しなかつたら

埋もれていってしまうということがあると思うので、ぜひ大学生のうち

にどんどんチャレンジしてほしい。特に法律という学問を修めている学生だからこそ、社会の中で誰かのた

めになる仕事に就く準備をしていくためにもすごくいい制度なので、ど

んどん使ってほしいと思います。中川 奨学金をいただいて、実際に

この制度ではチャレンジ精神やフロンティア・スピリット、自分で切り

開いていく力を養うことができると思います。弁護士や検察官、裁判官

を目指す人は、勉強に集中するあまりそういうことをちよつと敬遠しが

ちかもしれないですが、ロースクールの制度ができたことで少なくとも6

年間は勉強しないと司法試験が受けられませんが、大学1年生、2年

生のうちは結構、時間的な余裕も多

いと思います。ですから、積極的にこの制度を活用していただいて、是非、新しい一歩を踏み出してほしい

と思います。

法律の勉強だけではなくて、いろいろな世界を見て、いろいろなことを経験してほしい。それが絶対に弁護士などになってからも生きてくると

と思います。太田 『やる気応援奨学金』を申請して、それを実行していくことで、

自分の将来に対して真剣に向き合う機会や、粘り強さや、行動力が自然

に養われると思います。自分の可能性というのは、自分が思っている以

上にたくさんあり、それは『やる気応援奨学金』の申請準備から実行ま

でのプロセスでどんな形になっていくと思うんです。何かぼんやりと

でもいいので「こういうことやってみたいんだけどな」という気持ちがある人は、積極的にまずはエント

リーしてほしいなと思っています。佐藤 なかなか『やる気応援奨学

金』のようなものを用意している大学はなくて、中央大学に『やる気

奨奨学金』というものがあるという

ことを企業に話したりすると、「な

んだ、それは」という話が結構、多いのです。リソースセンターに行つ

て、やる気のある人たちと話すのは

すごく面白い。いろいろな人と話す

中で、自分の夢が固まっていったり、

方向性が見えていったりということ

があるので、ぜひこうした制度を活用して

用していただいて、自分のキャリア

パスを見つめ直していくのもいいの

ではないかと思っています。山田 「若者よ、外へ出よ」と伝

えたいですね。先ほども言いました

が、八王子に落ち着いてしまわない

で、『やる気応援奨学金』を活用して、外には本当に魅力的な人間が沢山

いるのだということを知って欲しいです。そうすれば次のステップを否が応でも踏もうと思うようになるので。三枝教授 そうですね。私も本当に同感です。(ここで傍聴していた学生記者から質問)

やる気はどこから出てくる？

学生記者 お話を聞いていて自分から一歩踏み出すことが、すごく重要だということを改めて思ったのですが、そもそも皆さんのやる気というのはどこから出ているのかなと、ちよつと興味がありました。

胸張って地元に戻るため

山田 正直に言うとうと焦燥感です

ね。中大というのは、国立大か私立大の第一志望を落ちて入ってきたと

いう人がすごく多いですよ。私もご多分に漏れずその一人でした。た

だ、進学した以上、この大学に来て

本当によかつた、将来胸を張って

地元に戻りたいという気持ちがあ

くあつたのです。しかし、それをど

ういうかたちで表に出したらいいか

分からなかつた。そんな時、たまた

ま降ってきた『やる気応援奨学金』に飛び付いてみた。そこからすべてが開けて行った。もうそれに尽きま

す。この大学でこうしたチャンスを得ただけで、今は本当に胸を張ってこの大学を選んで良かったと言えます。

**太田** 素晴らしい。私はそこまでしつかり考えていなかったのですけれども、好奇心が強くて、知らないことを知るのが面白いし、何か新しいことはやってみたいなと飛び付くタイプなんです。「こんな制度あるんだ、私にもできるかな」というちょっとした好奇心が、だんだん本気の「やる気」に変わっていったのです。

### やりたいことは全部やる

**金井** 私はケチだからだと思っ(笑)。違いますよ、人生についてです。お金の問題ではなくて、大学の間に行われることは全部やりたいというそのケチさです。

**中川** それは重要ですね(笑)。

**金井** 大学も就職もブランド力ではないと思うのです。大きい会社に



「ベースに置いたのは、ヒューマンリソース」と三枝教授

入っても毎日ファイリングしかできなかつたら全然、面白くないと思うし、小さい会社に入っても自分が会社を動かしていると思えればすごく楽しいと思える。だから、やりたいことをやらなければもったいないし、面白いことがあつたら飛び付かないともつたないと思います。

**三枝教授** やる気の出処もいろいろですね。先ほど、お話が出ましたが、『やる気応援奨学金』のような

制度はおそらく他の大学にはないでしょう。実施するには相当の時間とエネルギーが必要ですし、大学の運営上はなくても困りませんから。では、なぜ中央大学で始まったのかというと、私の考えはこうです。

目の前に何か切っ掛けがあれば大きく成長しそうな、私たちは「化けそうな」と言っていますが、元気で優秀な学生がいるのだから何かやらせてみたい。では、教員として何が

できるだろうかと相談して、こんなことができたらと構想を練る。でも、それだけでは不十分です。その構想を実現するには事務スタッフのサポートも不可欠です。いい企画であれば、実施するのは当然

ではないか、と言うのは簡単だけど、やるべきだとわかっているてもできないことはたくさんあります。タイムミングも大事です。然るべき学生、然るべき教員、然るべき事務スタッフ、これら3者の考えがうまく合致した時に、一つのプロジェクトがスタートして、それが3者にとつて実質を伴うものであればうまく回っていく。そういうことだと思えます。要するに、3者の然るべき出会いがあつて生まれたということです。

私たちは、機会があれば何かしてみたいという意欲を持った君たちが始めたのです。うまくいくという確信があつたわけではありません。やってみたら、予想を超える反応があり、現在のような仕組みに育ってきたのです。これからも、皆さんに続く元気な学生がどんどん出てきてほしいと願っています。

本当に今日は有難うございました。(拍手)